



## 第七卷第八號

香々

### 夏季雜吟

鹽野奇零

百味にもまさる時の清水かゝ  
 涼しさや流の雲に袖ぬれて  
 音聞きて涼くなりぬ岩清水  
 風の外聞くものなし閑古鳥  
 松風の音に疊みぬ白扇  
 流し行く筏の上や夏の月  
 山を降る雨に眠ぐや釣しの月  
 明安き夜を寝惜みぬ夏の月  
 起されて雨の跡見る寝寝かな  
 眠りたる子の手から飛ぶ螢かな  
 風薫る家やこの世の外らしき  
 二階から出舟を呼ぶや夏の月  
 エキ風によき唄出たり田草取  
 峠越する同者の笠や蟬時雨  
 待つ雲のよき程降りて青田かな  
 入去れば又來る鳥や岩清水  
 道暮れて水に明るき螢かな  
 魚河岸に物のにほひや日の盛り